

子 供 研 究 試 論

——子供性喪失の時代——

佐 藤 良 吉

目 次

- (1) 見失われつつある子供 (一) 子供の風景 (二) 子供喪失の時代 (2) 子供の風景の日常性 (一) 子供の日常性 (二) 二重の日常性 (3) 大人の生活の日常性 (一) 生活の日常性 (二) 母親の場合 (三) 教師の日常性 (4) 子供性の喪失 (一) 大人のなかの子供性 (二) 父性と母性 (三) 教師性 (5) 子供性の回復 (一) 子供理解の原理 (二) 子供性の回復

(1) 見失われつつある子供

(一) 子供の風景 子供の風景（存在）は、日常われわれの身近かで、いつでもどこでも、到るところでみることができる。ひと（大人）の住んでいる場所付近で、子供の風景（存在）に気づかないということは、通常まずほとんどありえない。事実、子供は都会や農山漁村の区別なく、ひと（大人）の身のまわりに、いつでもどこにでもいる。家庭や学校においてはもちろんのこと、都会では幼稚園や保育所、公園や遊園地、街路や店先き、博物館や図書館、映画館や劇場にもいる。農山漁村の場合には、村なかの空き地や、村集落の寺院や神社の境内、季節によっては、春には花野や田の畔道、夏には樹蔭や海の渚、秋には山裾や祭礼の集り、冬には木枯しの広場や、吹雪のなかにもいる。子供の風景の有様は、例えば石川薫子（小学一年）、つぎの「雪ふり」（「小羊」所載）という子供の作文をみてもわかる。これを読めば誰でも、冬の「雪ふり」という劇場舞台で、自在に自分を演じている子供の姿を、思いうかべずにはいられないはずである。

ことは東京にも、たくさん雪がふりました。きょうもあさから雪ふりです。そとは雪でまっ白になりました。ビルのおく上や、まどのところにも、家のやねにもつもりました。……わたくしは学校におくれないように、七時二十分にうちをでました。ついさいきんママにかってもらった、白とピンクのいろをした、スノーブーツをはきました。もようのついている、手ぶくろもしました。……雪はどんどんふってきます。空からつついて、おちてきます。かさのところにも、コートにも、手ぶくろにも、雪ふりの白いもようがつきました。おしごとに行くおとなの人たちは、ころびそうになりながら、みちをあるいていきます。じどう車やトラックも、雪みちをすべらないように、ゆっくりはしっていきます。……バスをまわっていても、88ばんのいつものものがきません。わたくしは82ばんにのりました。バスの中は人でいっぱい、みんな雪ふりの話をしています。……学校では一時かんに、こうていで雪だるまをつくりました。雪をころがして玉をつくりました。あたまもつくって、かおには石で目をつけました。雪なげもしました。雪あそびもしました。みんなも大よろこびです。……おうちにかえってからも、きんじょの男の子とあそびました。はじめに雪がっせんをやりました。雪山もつくりました。男の子どもは、まだ六さいです。わたくしと一つちがいです。……ママは雪ふりの日は、「つめたいから、小さいときからきらいだった」といいました。でもわたくしは、雪がふれば、雪あそびができるのでうれしいとおもいます。……雪はどんどんおちてきます。雪は夕方になっても、まだまだやみません。

このようにひと（大人）の身のまわりには、子供は四、六時中どこにでもおり、ひとの日常生活のなかで、子供の風景（存在）に出会わないということは、まずふつう考えられない。事実、子供は上述日常ふだんの通常の生活のなかにいるだけでなく、例えばつぎのような、非日常的な病院生活のなかにもいる。その模様は長期入院している子供と、友達との間で取りかわされた、以下引用の手紙文をみてもわかる。

(1)お友だちへ みなさんお元気ですか。わたしは東京医科歯科大学病院に入院しています。こんどは手じゅつのために入院しました。手じゅつは、二しゅうかんぐらい先きになるので、今は毎日けんさをしています。わたしは三年一組になりました。学校へは一週間ぐらいしか行っていません。わたしのしゅっせき番号は、一番になりました。みんなはなん組になりましたか、おしえてください。わたしの入院しているびょう室は、八かいだての四かいの402号しつです。六人べやでわたしいがいは、みんな大人の人たちです。おばあさんもいます。となりのおへやに中学三年の女の子がいて、いっしょにおくじょにいきました。その人はもう

六回も手じゅつをしたといっていました。わたしもがんばりますから、みなさんお元気でいてください。できたらお手紙ください。ではさようなら。(荒井陽子)

(2)陽子ちゃんへ よう子ちゃん、手じゅつは二しゅう間ぐらい先きになるのだそうですね。こわくはないですか。……金よう日学校からかえると、「よう子やん、早く来ないかなあ」と思います。女の子がわたし一人でさびしいです。(龍千砂子)

よう子ちゃん、いかがですか。お手紙ありがとう。ところでぼくの組は2組です。三年ではいろんなべんきょうがはじまっています。……ぼくはべんきょうがきらいです。(蛭原久敬)

ぼくは三年2組です。先生の名前は畑先生です。……いまやっていることは、わりざんです。(中島一人)

はやく公園へ行って、やきゅうやドッチボールをやってあそびまよう。(山田大輔)

事実、子供はどこにでも、男の子もおれば女の子もいる。年上の子供もおれば、年下の子供もいる。顔立ちの整った子がいる一方で、そうでない子供もいる。優しい子供がいるかと思えば、意地悪な子供もいる。伶俐な子供と、鈍重な子供もいる。快活な子供といっしょに、そうでない子供もいる。体の丈夫な子供がいるかと思えば、体の弱い子供もいる。勉強や運動好きの子供と、その反対の子供ももちろんいる。このほか子供の性質や性格、健康状態や生活の仕方、ものの考え方や感じ方、行動の仕方その他、細かな点にまで立ちいってみれば、一人として同じ子供がいないことに気づく。そのことは例えば、小沼和(東京城山小学校長)、つぎの「子供の情景」(「いしずえ」所載)という、一文をみてもよくわかる。

冬休みの校庭は潤いを失って、荒涼としています。校庭をとりまく裸木は影を長く落とし、澄み切った青空と陽光はまぶしい程なのに校庭は寂寥として物悲しい感じですが。それが一月九日の始業式の校庭は、はなやいで活気に満ち、一斉に咲きほこる陽春の草木の趣きを呈します。校庭は四季を問わず、子どもたちが、けんらんたる花を咲かせてくれています。特に小学校の校庭は、一年生から六年生までの子どもが、それぞれの発達と特徴で、みずみずしい遊びの花を咲かせ、競い合っています。定型化した校庭で、子どもは思い思いに遊び、校庭がどのような型であろうと、意にかいせずそこを流動的に活用してしまいます。遊びが活発であればある程、子どもは大きな声で会話を楽しみ、かけあうことばは要領よく、短かくて理解しあえることばを、連発しています。私が遊びのかたわらに立っていると、低学年の子どもほど話しかけてくれ、とくべつ何かを聞こうともしない

のに、遊びのこと、自分のこと、家族のことなどをよどみなく話してくれます。そのうちまわりの子どもも集ってきて、会話ははずみ、なわとびやボール遊びを、最高の技能で披露してくれます。高学年は遊びの充実で応えてくれます。……

机に向って、書きものをしている手をやすめて、窓の外を見ますと、そこには実に様々な子供のいることにあらため気づきます。元気な子供もいます。温和な子供もいます。けんかをして争っている子供もいます。敏捷な子供も、そうでない子供もいます。体つきのしっかりした子供も、弱そうな子供もいます。行動の仕方も一人ひとり違います。元気にかけまわる子、何やら呼びあっている子、鉄棒にぶら下っている子、砂あそびをしている子、ボール投げを楽しんでいる子、陽だまりで二、三人で話あっている子など様々です。しかしこれらはいずれも外見上のことで、子供の性質や性格、生活の仕方や健康、家庭や生育歴、そのほか子供の内面世界にまで立ちいってみるとしたら、おそらく子供は誰ひとり、同じ子供宇宙に住んでいる子供はいないはずです、いずれにしても子供という子供世界の劇場舞台上、自分を自在に演じている百人百様の子供を見ていますと、ふと時を忘れ、魅了されるのは、けっして私だけではないと思います。

(二)子供喪失の時代 子供は以上みてきたように、ひと（大人）の身近かに、四、六時中どこにでもおり、しかもそこには、百人百様の様々な子供の風景（存在）がみられる。この意味でみるかぎり、子供の風景は、あたりまえすぎるほど、あたりまえのことであって、大人が子供とかかわり、日常子供と出会う機会に、何んのことかく必要もないように思われてくる。しかし実際には、今日ひと（大人）は子供が理解できなくなり、親は子供が見えなくなり、学校の教師すらもが、子供を見失いつつあるとさえいわれている。新聞や雑誌、ラジオやテレビ、そのほか学校や家庭、あるいは社会などのあらゆる方面で、子供との出会いの必要が叫ばれている頻度とは反対に、今日ほど大人と子供のかかわりの貧困な時代はないともいわれている。これをまた親や教師をふくめた、大人による子供の喪失、あるいは子供置き去りの時代とみても同じことになる。いずれにしてもこのことは、子供の側からすれば、親や学校の教師をふくめた大人が、身近かで親しい子供との間柄に無関心になって、子供の手の届かない無縁の存在に転落しつつあるということである。事実、こうしたことは日常茶飯の生活の

なかにも、少なからずみることができる。親と教師をふくめた、大人と子供の間柄が、他人ごとのような、よそよそしい乾いた関係になり、家族の間にすら、それが広ろがっている。そのことは例えば、つぎの「会話もなしに食事する家族」(「朝日新聞」所載)をみても、その一端がうかがえる。

受験も終わったので、近くのレストランでアルバイトを始めました。土、日の晩は家族連れのお客が多く、そういう経験の少ない私はうらやましさと、何となくうきうきした気持ちで注文を取りに行きます。ところが、どうでしょう。父親は新聞、母親は週刊誌、子供はマンガにかじりついて、ひとことの会話もない有様です。すべてがそうではないにしても、いったい何のために家族で食事をしに来るのでしょうか。家庭は、人が初めて接する社会集団であると言います。子供はそこで、人と話すことや人を思いやることを自然に身につけて行くのだと思います。両親を目の前に、ひたすらマンガを読む、あるいは読むことに何のためらいもない子たちに、他人のことを考えろと言う方が無理なのかもしれないと思いました。一家そろって食事することさえ難しい世の中です。たまに家族で食事をする時ぐらい、もう少し親子の触れあいを楽しむべきではないでしょうか。

(2) 子供の風景の日常性

(一)子供の日常性 子供は上述すでにみてきたように、ひと(大人)の身のまわりに、いつでもどこにでもいる。しかもそこにいるのは、一人ひとりみな異なった、百人百様の様々な子供である。この点でみるかぎり、大人が子供とかかわり、出会う機会に、何んの不自由もないのがあたりまえのはずである。しかし実際には、これまですでに指摘したように、今日ほど親や教師をふくめた大人によって、子供が見失われつつある、子供喪失の時代はないといわれている。その根本原因は何か。それをひと口にいうことは難しいが、それには以下に述べる三つの理由が考えられる。

その第一は、子供の生活における、子供の風景のありきたり性、あるいは子供の存在の日常一般性ということのなかにある。このことはいいかえれば、子供がいつでもどこにでも、しかも百人百様の子供がいるのが、あたりまえすぎるほど、あたりまえという子供の風景の日常性が、子供の側で子供

自身のありきたりではないもの、非日常な子供の本質、子供性を見えなくする働きをしているということである。これをまた子供の風景（存在）の日常性が、子供の原風景（本性）を風化して、非日常な子供の本性（子供性）を、自分自身でかくす、逆作用をしているとみても同じことになる。以上このことを大人の側からすれば、大人自身もまた、このような子供の風景（存在）の日常性に惑わされて、子供の原風景、子供のなかのもう一人の子供、目ではみることのできない子供性に、注意を向けなくなってしまうということである。事実、大人は子供が四、六時中、大人の身近かにいるのは、あたりまえすぎるほど、あたりまえのことときめてしまっていて、子供のいない日常風景など、およそ想像してみることすら、しなくなってしまうのは、たしかに親にしても、親は家庭に子供がいるのは、当然すぎるほど当然のことであるときめてしまっていて、子供がいない家庭の空白場面など、思いみることもさえないはずである。学校の教師は、また学校の教師で、学校に子供がいるのは、あたりまえすぎるほど、あたりまえのことと、疑わなくなってしまうと、子供のいない非日常的な学校の状態など、考えてみることすら、できなくなってしまうはずである。そのことは例えば、「子供と生活」（「非日常のなかの子供」佐藤良吉）所載、つぎの引用についてみてもうなづける。

子供たちは私たちの身のまわりに、いつでも、どこにでもいます。私たちの身のまわりで、子供の姿を見かけないということは、まずありえないといってもよいと思います。こう考えてみますと、子供がいるのはあたりまえすぎるほど、あたりまえということになります。あたりまえということは、いいかえれば、それがふつう（通常）ということです。これをまた日常性といっても、同じ意味になるでしょう。日常性ということの特徴は、それがあたりまえということですから、そのことについて、あらためて考えなおしてみる必要がないということです。……太陽が東から昇り、西に沈むのはあたりまえのことです。昼は明るく、夜が暗いのもあたりまえのことです。春のつぎに夏が来て、夏がすぎれば秋になり、やがて冬になるということもあたりまえのことです。春になれば桜が咲き、夏になればひまわりやゆりの花が咲くのも、あたりまえすぎるほど、あたりまえのこ

とです。……あたりまえのことですから、誰もそのことについて疑いません。疑わなくてすむというのが、あたりまえ（日常性）ということであって、生活の日常一般性あるいは日常化といっても同じことになります。

しかし考えてみれば、昼と夜の区別は、地球の自転のために起る現象です。太陽が朝、東から昇り、西に沈むとはいっても、太陽自身が昇ったり、沈んだりしているわけではありません。私たちにそのように見えるから、私たちが勝手にそうきめてしまっているだけの話です。よほどの天体物理学者でもなければ、昼夜の区別や、季節の移り変わりについて、納得のいく説明はできないはずです。地球がまるいといっても、そのように誰かから教わっていたから、そうきめてしまっているだけのことです。小さい子供でも地球はまるく、クジラは魚の形に見えても、動物であることを知っています。地球はまるく、クジラは動物だと教えられて、知識が日常化してしまっているからです。自分で確かめて、そう思っているわけでも、自分で確かめる方法を知っているわけでもありません。そうきめて、そう思っているだけの話です。それが日常一般性ということです。この意味でいえば、私たちはいつの間にか、日常性に日常化されて、考えることをやめ、非日常なほんとうの世界と出会うことを、忘れ去ってしまっているといえるでしょう。

子供の風景（存在）についても、同じことがいえそうです。子供はたしかに、いつでもどこにでも、しかも百人百様の子供がいます。子供がいるのはあたりまえで、子供のいない非日常の場面など、誰も考えてみることなどしないでしょう。大人は自分の身近かに、親は家庭に、学校の教師は、学校に子供がいるのは、あたりまえだときめてしまっています。この反対の状況など、大人も親も教師も、想像してみることすらしないはずです。これが子供についての大人の日常一般性です。日常性は、疑ったり考えたりしないという、ありきたり性に始って、日常化という日常性で終わります。これでは太陽は東から昇り、西に沈むのがあたりまえときめてしまっていて、それを深くは確かめようとしないと同じです。目にうつる太陽は見えても、それだけでは太陽の実態をとらえたことにはなりません。子供についても同じことです、大人のありきたり（日常）性のなかにひた切り切ってしまうては、いつまでたっても、子供の本性は見えてはきません。子供の属性は現象としてみえはしても、子供性はとらえられません。……子供の本性をみようとすれば、大人が非日常の世界に身をおきなおして、日常一般性の奥にある、子供の本性に深く目を注ぐほかないでしょう。

(二)二重の日常性 こうして子供は、子供の側における、子供の風景(存在)の日常性という理由のために、子供自身の原風景(本質)を、自分から見えないものにし、他方また大人の側においても、大人が子供の風景(存在)

の日常一般性に慣れ切ってしまっていて、この両者の間における二重の日常性が、いっそう子供の原風景（子供性）を、理解しにくいものにしてしまうという結果にしている。事実、ひとの生活の日常性は、多かれ少なかれ、きわめて一般常識的で、もう一つのかくされた非日常の原風景、いいかえれば目では確かめられない、内面的ないしは本質的な世界に、目を注ぎ、深くみつめなおすことを、なおざりにさせがちになる。子供の風景（存在）についても同じことであって、子供を観念的に、子供一般として、通念として、部分として、断片として、表面的あるいは形式的にみることはしても、子供のなかのもう一人の子供、非日常な子供本性については、顧りみようとしないのが、あたりまえということになる。

そのことは比喩的にいえば、ちょうど朝になれば、太陽が東から昇り、夕方になれば西に沈むという日常に慣れ切って、上出引用のように、昼と夜の区別は、実は地球の自転の結果であるという事実など、思いみることにすらしめないのに似ている。海や空の色は青にきまっているときめてしまっていて、海には海の青さがあり、空には空の青さがあるということなど、気づこうとしないのと同じである。薔薇の花の色は赤く、百合の花の色は白にきまっているという、日常性に浸り切って、薔薇の花の色は薔薇の赤であり、百合の花の色は百合の白であることなど、思いおよばないのに似ている。子供についても同様であって、子供がいつでも、どこにでもいるのが、あたりまえすぎるほど、あたりまえという日常性に慣れ切ってしまえば、子供の非日常な原風景、いいかえれば子供のなかのもう一人の子供、子供の本性など、目にうつらなくなるのは当然のことである。

(3) 大人の生活の日常性

(一)生活の日常性 大人が子供が理解できなくなり、親が子供が見えなくなり、学校の教師すらもが、子供を見失いつつある第二の理由は、大人の生活におけるありきたり性、あるいは日常一般性ということのなかにある。

このことはいいかえれば、大人は誰でも、大人の生活の日常性に埋没し切ってしまうていて、子供とかかわり、出会う機会を、大人自身みずから失ってしまうていているということである。事実、多くの大人たちは、好むと好まざるとにかかわらず、大人の生活（職業）の日常性のなかに埋もれすぎていて、子供とのかかわりを、みずから置き去りにしてしまっている。このことはあらゆる大人の、またどのような仕事（職業）に従事しているひとの場合にも、例外なくあてはまる。

その実例は例えば会社員など、サラリーマンの場合についてみても確かめられる。事実、かれらはふつう早朝に家を出て、夜遅くまで仕事や雑事に追われる生活をしている。かれらの生活がどれほど大変なものであるかは、朝のラッシュ時の駅の様子や、過密な通勤電車の有様をみただけでもわかる。今日、都会においては家から勤務先まで、一時間も電車に揺られて、通勤することなどはあたりまえになっている。出勤すれば出勤したで、勤先きでは過重な仕事がかれらの来るのを待っている。仕事が過重で多忙なだけでなく、仕事上の競争、あるいは社員相互の人間関係で、体力や神経をすり減すこともめずらしくはない。こうしてようやく仕事を終えて帰宅しても、夜遅い場合には、家はただ寝る場所にすぎないということにもなりかねない。朝はまだ子供が寝ているうちに家を出て、仕事を終えて帰宅すれば、子供はすでに眠ってしまったていているということもめずらしくない。このような生活はサラリーマンなど、会社員にとっては、きわめて日常一般的なことであて、けっして例外的なことではない。このほか今日では、会社員など勤め人の場合には、転勤や転任にともなう、単身赴任など親子分裂の悩みも深刻になっている。そのことは例えば、つぎの「単身赴任家族の悩み」（「朝日新聞」所載）をみても、その一端がわかる。

夫が転勤をことわったあと、社内で微妙な立場におかれて悩んでいます。静岡県内のある企業の係長クラスで、42歳。私と高一、中二の男の子は大宮市内に住み、夫はもう二年間も単身赴任です。ところがこの九月（昨年）に、関西のある

支店の課長にという異動を打診されたといひます。「もっと遠くなるのねえ」と私が思わずため息をつくとき、夫はうなずくだけで、沈んだ様子でした。いまでも二週間か、ときには三週間に一度しか家に帰れず、思春期のむづかしい子供と接触する機会がほとんどないことが私たち夫婦の悩みだからです。結局今度の転勤はなしになりました。夫ははっきり拒否はせず、子供の教育についての心配を訴えたようですが、その結果、人事のリストからはずされたということです。しかしその後、夫は毎週末に帰ってきたり、月曜朝になっても一列車遅れたり、社内で上司や同僚のそぶりが急によそよそしくなったとか、ほかに仕事を探そうか、などつつぶやくこともあります。一人でノイローゼにでもなっていないかと心配な毎日です。そんな夫を助けるにはどうしたらいいのでしょうか。

上述このような大人の生活は、しかし何も会社員など、サラリーマンの場合にかぎったことではない。いずれの大人、職種の区別なく、きわめて日常一般的なことであって、とくべつけっして常識外のことではない。事実、これを仮りに商人の場合に例をとってみても、商人は商人で、毎日の商売に明け暮れしている。職人は職人で、けっしてかれらの仕事から解放されることはない。農民に例をとってみても、農民は農民で、四季を通じて、農耕や農作業に追われている。農民が農耕や耕作を怠れば、一粒の米も麦も手にしえないことは、かれら自身が一番よく知っている。漁民もまた海に出て、漁撈にはかり知れない労苦を払っている。このほか他の職業、例えば医師にしても、医師は医師で、患者の診察と治療に、多忙な時間をすごしている。医師が仕事を怠れば、患者は病患からは救われない。公務員の場合も公務員は公務員で、公務の処理に忙殺されている。郵便局員は郵務に、駅員は駅務に追われて、他事をかえりみる暇はない。局員が郵務を怠れば郵便物は滞り、駅員が駅務を放棄すれば、電車は動かなくなる。ひとはこのように、一人まえの社会（職業）人ならば、誰でもが例外なく、自分の仕事（職務）に、専心しなければならぬよう仕組まれている。朝も昼も夜も、春夏秋冬あるいは、年末年始の区別なく、ひと（大人）は年中働きづめのことが多い。これが大人の日常性であって、きわめてありふれた、どこにでもみられる生活の実態である。そのことは例えば、つぎの

「今年も仕事で父は不在の元旦」（「朝日新聞」所載）をみてもわかる。そこには「せめて正月ぐらいいは、家族そろって迎えたい」という、子供の側からみた、大人の仕事社会における、日常性の模様が記されている。

父が不在のままで元日の朝を迎えた。大みそかの朝から仕事で、まだ帰って来ない。父は国鉄機関区の職員である。昨年の年越しにもやはり父はいなかった。家族そろって新年を迎えられるのは何年おきだろう。幼いころから「お父さんがお休みだからお正月には泊まりに行くの」という友人をうらやましく思っていた。どこにも出かけなくてよい、ただ家族そろって正月を迎えたかった。ここ数年、国鉄に対する風当たりは非常に強い。勤めている人たちは張り合いがないことだろう。年末年始に列車が動いていること自体、当然のこととしか思われぬのだから、出勤しても報われないという気がする。今年は事態が好転してくればよいのだが。国鉄以外にも年越しで働いている人はたくさんいるだろう。その人たちにとって、1984年が良い年でありますように。すべての人にとって、良い年でありますように。

たしかにこのような日常性は、大人のなかの生活一般の実態であって、特別けっしてめずらしいことではない。こうした大人の生活における、ごくあたりまえすぎるほどあたりまえな日常一般性が、いつの間にか知らず知らずのうちに、大人と子供との間に隔りをつくり、結果的にお互いを他人ごとのような、よそよそしい乾いた関係に追いやることになる。隣近所の子供にまでは、手が届かないのは致し方ないにしても、一つ屋根の家庭で毎日ともに暮している、自分の子供にすら、出会う機会を失うことにもなりかねない。これが大人と子供の日常一般性の実態であってみれば、大人が仮りにたまの休暇に、どれだけ子供と親密なかかわりをもったとしても、子供の乾き切った感性は充たされない。一時的で表面的な、その場かぎりの間にあわせには役立っても、子供と深くかかわり、非日常な子供、子供のなかのもう一人の子供、子供性と出会うことなどおぼつかない。そのことは例えていえば、乾いた地面に、一時的な打ち水をしたところで、大地を浸すまでには至らないのに似ている。大人の生活の日常性が、いつの間にか大人と子供の間柄を疎遠なものにし、他人ごとのような、よそよ

そしい潤いのないものにしてしまっている結果である。

(二)母親の場合 これに対して母親の場合は、上述大人の場合とは違って、一般的には子供と出会い、かかわりをもつ機会に恵まれているように思われがちである。しかし母親の場合でも、実際には子供と出会うとくべつ有利な条件をもっているわけではない。事実、母親とはいっても、家庭の主婦の場合には、主婦として家庭の家事、雑事に追われているのがふつうである。朝昼晩の食事の準備や後始末、家の掃除や洗濯など、家庭の仕事はかぎりなくある。このほか日常の用を足すための買いものや雑用、あるいは交際や社交にも時間は必要になる。来客があれば接待し、急用があれば、外出もしなければならない。旅行に出て家をあけ、何日も自宅を留守にすることもある。母親であるからといって、四、六時中子供といっしょにいられるわけではない。まして社会に出て、仕事をしている母親の場合には、いっそう子供とかかわる時間は少なくなる。今日では母親の場合でも、専業または時間給などの職業をもち、社会に出て働いている例はめずらしくない。このため子供を長時間保育所にあずけたり、あるいは子供が学校から帰ってきて、母親が家庭にいない、母親不在の「鍵っ子」という例も日常化している。

母親が社会に出て、働くことの是非は、ひとにより立場によって異なり、評価もまた様々である。子供のことを考えると、「母親は家にいるべきだ」という意見もあれば、母親不在では「子供が寂しい」という考えもある。またこれとは反対に、「母親も社会に出て、自分の能力を生かすべきだ」という主張もあり、「働く母に尊敬」という事実もある。そのことは例えば、つぎの三つの引例(「朝日新聞」所載)をみてもわかる。いずれにしても今日、子供が大人の仕事社会の襲、日常性の谷間のなかにあって、生きるほかない事実だけは確かである。

(1) 両立に悩む 「僕の給料で食べていけるだろう、子供の教育を考えたら、やはり女は家にいるべきだよ」。共働きの疲れと、子供のしつけに悩む時決まって出

る夫の言葉。仕事を続ける私との間には、仕方がないでは済まない多くの問題が出てきた。一生働き続けるということで結婚した私だったが、夫の転勤で仕方なく仕事をやめた。どんなに話し合っても「子供はカギっ子にはしたくない」と言う夫。さしあたりパートとか内職なら……という夫に、私はどうしてもうなずけない。パートや内職でも有意義な仕事はあるだろう。しかし、各種の技術を持ち、一線で働いてきた身には寂しい内容ばかりだ。正規に働き出せば離婚だという夫の考えは当分変わりそうもない。(2) 子供は寂しい「共働き嫌う夫 両立願い悩む」を拝見しましたが、生活が安定しておられるのですから、「子供をカギっ子にしたい」と言われるご主人のお気持ちはもっともだと思います。外で働かなければ、自分らしい生き方はできないものなのではないでしょうか。子供にとって母親の存在がどんなに大切かを、お考えになったらと思います。私の長女は専業主婦で小四の孫娘がいます。たまにしか会う折もありますが、学校から帰っても母親がいないと考えるだけでも、私は孫の寂しさを思ってたまらなくなります。(3) 働く母に尊敬 私自身、三歳の時に父を亡くし、まだカギっ子という名前のない時分から、ずっと働く母を見てきた。さびしい思いも多々したが、それに余りある働く母への尊敬の念と思いやりを持てたように思う。体験からも、小学高学年くらいになれば親より友人を必要とし、自分の世界を持つようになる。子育ても、家族の健康を守ることも大切な仕事だが、主婦が人間として生き生きと生きている、という前提があってこそではないだろうか。

(三)教師の日常性 学校の教師の場合にしても、上述の生活の日常性は、他の職業人とそれほど変わってはいない。学校の教師の仕事(教職)は、いうまでもなく子供とともにいて、子供の成長(発達)を促すことにある。しかしそのまえに、教師も他の職業人の場合と同じように、個人としての日常生活の日常性と出会っている。家庭があり自分に子供があれば、家族に対する責任や、子供とのかかわりも必要になる。このほか家庭の雑事雑用はかぎりなくある。このような生活のありきたり(日常)性が、知らず知らずのうちに、ひとを日常一般化の方向に押し流してしまう事情は、教師の場合も他の職業人と少しも変わってはいない。

そのうえ教師は教職に必然的にともなう、教職上の日常性という、大きな落とし穴と隣合わせで仕事をしている。学校と自宅が遠い場合には、一時間以上も過密な電車で揺られ、通勤登校しなければならないのは当然ま

にしても、学校にすれば来たで、学校では教え切れないほど山積みされた授業が、教師の来校を待っている。教えることだけで力つき、「教えることから、感じ考え、生活することへ」などの指導はおぼつかない。それが実態であってみれば、教師は成績のあがらない子供や、学習進度の遅れがちな子供に対する、特別の対策も当然考えなければならなくなる。このほか教師は子供の健康や生活上の事柄、場合によっては家庭の事情にまで立ちいって、配慮をしなければならないということもある。教師の仕事はこのように、教室で授業をしていさえすればよいというわけにはいかない。子供や家庭に対しての気づかいはいうまでもなく、授業がすめばその後始末や、つぎの指導の準備もある。成績の評価や助言、クラブ活動の指導や、学校行事への参加も欠かせない。放課後は放課後で、父母の相談に応じたり、場合によっては、家庭訪問ということも必要になる。そのうえさらに、上述の直接的な子供の指導活動のほか、教務の分掌という事務的な仕事もある。職員会議や担任会、部会その他研究会への出席も要請される。今日、学校の教師は、煩雑な雑務に追われて、本来の教職に死頭できなくなってしまっているとさえいわれている。休み時間はもちろんのこと、放課後も子供と遊んだり、話をしたり、子供の心配ごとに耳を傾けてやることなど、到底不可能な話であるともいわれている。これが教師の日常一般性の実態であってみれば、子供と深くかかわり、子供のなかのもう一人の子供、子供本性（子供性）と出会うことなど、おぼつかないとしても当然ということになる。

このようにみてくると、学校にどれだけ多数の子供がいたとしても、教師が子供とかかわらなければ、子供の側からすれば、学校に教師が一人もいないのと同じことになる。学校に教師がどれほど数多くいても、子供が教師と出会う機会がなければ、教師にとって、学校に子供が一人もいないのと同じことになる。いいかえれば学校に、多数の教師と子供がいるという事実と、この両者がつねに深くかかわり、邂逅するということとは、ま

まったく別の事柄であるということである。教師の生活一般のありきたり（日常）性が、仮りにこのような実態であるとすれば、教師の身近かに、いつでもどこにでもいる子供たちをすら、教師の側から見失う結果になるとしても、あたりまえということになる。教師の日常生活の模様については、戦前1918（大正7）年（玉城肇「日本教育発達史」所載）と、戦後1947（昭和22）年（「教員の活動の実態調査」所載）の女教師の実例にてらしてみても、その一端がわかる。今日においては、教職に対する一般の理解もすすみ、勤務上の諸条件も、改善されつつあることは確かであるが、しかし教師の日常性の実態は、旧態と依然それほど変わってはいない。

（1）戦前 起床5時半、身仕度6時まで、寢床の片附やその他の掃除が30分から40分。食事が20分、そしてはや7時になります。当時の規定ではいつでも朝会前20分までに出勤することになっています。この朝会に15分かかりますから、始業時間が8時なら7時25分までに出勤せねばならぬわけです。……放課後30分は掃除の監督。20分は成績表の採点、30分乃至1時間は教案の製作。その他諸準備に30分。それゆえ帰宅時間は大方4時半から5時頃です。但しこれが最も用事のない日で、1週間に2度、すくなくとも1度は教員会、発表会、研究会に費され、事務の分担上でひまがかかり、私どもの帰宅平均は5時であります。帰宅後、着物の着がえその他で5時半、夕食までに時間があれば、整理、掃除、夕食の手伝い。夕食6時、あと片附で7時、入浴して帰れば8時になりそれより2時間、新聞を見るなり、また勉強するなり、これが自分の時間です。研究するのも本を読むのも、着物を縫うのも、襦袢の襟をかえるのも、翌日の教材を調べるのも、雑談を交えるのも、すべてこの時間です。……私達が一番待つものは、日曜日です。他の人のそれと異った意味において。すなわち日曜日は私達の安息日ではなく労働日です。先ず1週間の大掃除の日です。また洗濯の日です。また訪問の日です。また裁縫の日であります。「今度また日曜日がつぶれる」というのは「また洗濯物が1週間たまる」というのと私達には同じ意味に聞こえます。それだから日曜が1つつぶれる毎に汚れた物をまた1週間家に置かねばならぬ苦痛を忍ばねばなりません。その日曜日が1学期に何度あるか。これを17週として祝祭日と共に18度とすればうち2度は女教員研修会のために、1度は研究会のために、2度は日直のために、その他のことですくなくとも2度位は出勤があるとすれば、実際に私達の日曜は11度であって、そのうちにももちろん雨が降る日もあります。その他家庭訪問などがあります。訪問しなければならぬところがあります。実際日曜日は私達の働く日として楽しんでおる尊い尊い少数の日であります。それさ

え得られぬに、研究会を欠席したからといって叱られ、それが引いて怠惰教員の資格にかぞえられます。学校における優良教員が往々家庭においては或る意味の不良主婦である場合が少なくありません。……母になった日課を、申し上げます。起床は5時半、乳をつくる。毎朝小川にいったむつきの洗濯、子供の世話。7時20分登校放課後5時帰宅、夕食まで子供の世話。都合良く眠っておればその間に掃除、整理。夕食後入浴。夜は8時すぎ頃より裁縫等。こんな有様で実に新聞もろくろく読みません。早く帰れば帰るほど多用であります。実に私の周囲は用事ばかりで満されており。実のところ私は子供ができて以後、宅においては教育雑誌すら10分も読みません。他の書籍など図書館から借りても読まずに返すことがめずらしくありません。今ではそれも残念と思わぬようになりました。

(2)戦後 午前6時起床、7時まで保育所の準備、朝食の用事、赤んぼうにミルク。7時から7時50分まで子どもに食事をさせる。朝食、子どもと自分の着がえ。7時50分家を出て子どもを保育所にあずけ電車バスで8時25分学校に到着。午後2時授業のあとの掃除の指導も終る。2時から25分間子どもの日記、学年の問題の作成などする。2時25分から4時30分までPTA学年部会。その後30分家庭訪問をして、買物、保育所への迎えなどで家に帰り着いたのは6時35分。その後夕食準備、子どもの食事、その間電話の応待もあって食事をしたのは8時を過ぎていた。夕食8時15分から洗濯、赤んぼうの着がえ、ねかせる。大雨のため駅に主人を迎えにゆく。主人の夕食が終り、洗濯ものを干し終ったのが10時25分。そのあと学校の仕事、学級PTAの仕事をやり、就寝は12時。

(4) 子供性の喪失

(一)大人のなかの子供性 大人が子供が理解できなくなり、親が子供が見えなくなり、学校の教師すらもが、子供を見失いつつある根本理由は、第一に、すでにみてきた子供の風景(存在)の日常性ということであり、第二は、大人の側における、大人自身の生活一般のありきたり性、いいかえれば大人の生活の日常性に起因していた。第三は、以下に述べる大人の側における、大人のなかの子供性の喪失、あるいは欠落ということが考えられる。これをまた親や教師をふくめた大人が、大人のなかのもう一人の子供、子供性を喪失あるいは欠落していて、いま現に目のまえにしている子供たちをすら、理解できなくなってしまうとみても同じことになる。

いずれにしても大人は誰でもが例外なく、もともとは子供時代を子供と

して過し、その結果として、今日の大人にまで成長してきたはずである。いうまでなくここで子供というのは、すでにみてきたように、子供が大人にくらべ、年齢が大人におよばないからというわけではない。幼なくて小さくて、可愛らしく、大人に依存しなければ、自分では何一つできないから、子供とみるわけではない。食べるものから着るもの、住むところその他、万般のことがらを、すべて大人の力なしには生活できないから、子供というわけでもない。未熟で不完全で、自立も自活もできないから、そのために子供とよばれるわけでももちろんない。これらもたしかに、子供の特徴の一つではあるが、しかしそれらはいずれも、ここでいう子供の絶対条件ではない。表面的あるいは部分的な、子供の属性の一部ではあっても、子供の全部あるいは本性ではない。表面的属性における子供と、内面本性における子供の違いは、子供が子供のなかのもう一人の子供、子供の本性を生きているか、どうかの一点において区別されるべきである。この意味でみるかぎり、子供がいま現に、子供の年齢をすごしている場合でも、子供本性において生きているのでなければ、表面上どれほど子供にみえても、ここでいう子供とはいえない。この点で区別するかぎり、外見上どれだけ子供らしく装っていたとしても、子供とはいえない子供はいくらでもいる。

一般に子供は出生すれば、誰でも例外なく子供とよばれている。しかし上出の観点からみるかぎり、出生したという単なる事実からだけでは、子供ということとはできない。子供は出生し、子供性を育くむ過程を深めて、しだいに子供にまで成長していくほかないのである。このように子供は本来、子供のなかのもう一人の子供、子供本性において子供となり、またその結果として大人とも至りうるのである。上述この意味で子供性は、子供が子供となりうる不可欠の条件であるだけでなく、大人が大人に至りうる場合の必須不可欠の条件ともなる。事実、大人が大人のなかのもう一人の子供、人間性をもっていなければ、ここでの大人に価する大人とはいえない。親が親にはなれても、父母性をそなえた父や母とはなれない。授業を

受けもつ単なる教科の教師とはなりえても、教師の資質、教師性をそなえた、子供と出会う教師になりうる保証はどこにもない。このように子供性は子供が子供となり、また大人が大人となり、あるいは親が父母となり、教師が教師ともなりうる場合の、不可欠の根本要件になる。いいかえれば子供のなかのもう一人の子供、子供性こそは、子供が子供となり、ひとが大人となり、親が父母となり、教師が教師となりうるための第一起点、出発点ということになる。要するに大人における人間性といい、親の場合の父母性といい、あるいは教師における教師性とはいっても、結局、それらはいずれも子供のなかのもう一人の子供、子供本性が大人世界において、噴泉または開花した結果にほかならないからである。以上子供性をこのようにみて、当然辿りつく帰結は、父母や教師をふくめた、子供と大人の違いは、単なる表面的あるいは、外見上の属性についてのことであって、本来この両者の間に、人間本性上の本質的差異はないということである。

事実、ひとは誰でも、子供のなかのもう一人の子供、子供性を培育する過程を通してますます子供となり、子供性を発展、伸長した結果として、いっそう大人にまでなるほかないのである。この点でいえば子供になることの難しさは、子供性を発展、深化することの難しさを意味し、大人になることの難しさのなかには、その根本において、子供になることの難しさがふくまれている。このようにみてくると、大人に先き立つ子供の成長期は、大人へまでの単なる通過点、一階梯でないことがいよいよ明らかになる。そのことは例えば、Fröbel (1782—1852) の「人間の教育」(「Die Menschenziehung.」荒井武訳) 所載、つぎの指摘、「成人が成人になるのは、成人の年令に達したからではなく、ひとえに、かれの幼年期や少年期の諸要求が、かれによって、忠実に叶えられたからに他ならない」以下、下記の引用にてらしてもわかる。ここで見落してならないことは、かれの指摘する子供(発達)期に占める、子供期の底深い意味についてである。

かれらは、人が、少年の年令に達すれば、少年であり、青年や成人の年令に達すれば、青年や成人であると信じ、そのようにきめてしまう。しかし、ほんとうはそういうものでないことは、少年や青年が、少年の年令や青年の年令に達したから少年となり、青年となるのではないのと同様である。少年が少年となり、青年が青年となるのは、その年令に達したからではなく、かれが、そこで、幼年期を、さらに少年期を、かれの精神や身体の諸要求に忠実に従って、生き抜いてきたからである。同様に、成人が成人になるのは、成人の年令に達したからではなく、ひとえに、かれの幼年期や少年期や青年期の諸要求が、かれによって、忠実に叶えられてきたからに他ならない。両親たちや父親たちは、これ以外の点ではきわめて洞察力に富む、有能な父親たちや両親たちでも、幼児がすでに少年や青年らしく振舞うことを要求するばかりでなく、とりわけ、少年がすくなくとも成人らしく振舞うこと、いや、少年が、その態度や言動のすべてにわたって、いちはやく成人になること、したがって少年および青年の段階を越えること、を要求する。幼児や少年のなかに、未来の青年や成人の萌芽や、その素質やその輪郭を見て、それを尊重することと、かれをすでに成人と見たり、成人として取り扱ったりすることや、すでに青年や成人らしく振舞ったり、青年や成人として感じたり、考えたり、行動したり、態度をとったりすることを幼児や少年に要求することとは、全く別のことである。このようなことを要求する両親や父親たちは、次の点を見落とし、忘れてしまっているのである。すなわちたいいの場合は、他ならぬかれら自身が、かれらの要求によってその子どもが飛び越えなければならない諸段階を、なんらかの関係で、その本性に従って、生きぬいてきたことによるのみ、およびその程度に応じてのみ、有能な両親や父親、したがってまた有能な人間になったのであるということである。

上掲 Fröbel の指摘をみて教えられることは、いずれの成長（発達）期も、それぞれ独自の深い意味をもっていて、大人が大人に至りうるのは、大人が単に大人の年齢に達したからではなく、ひとえにそれに先立つ子供（成長）期において、それぞれの時期の諸要求が、充分にかなえられた結果にほかならないという認識である。いいかえればこのことは、大人に先き立つ子供という成長期において、子供の個有の諸要求（子供性）が十二分に、愛護充足される必要があるという趣旨にほかならない。以上これらのことから明らかなことは、成長期に子供として、充実完全に生きることが、結果的にみて子供あるいは大人へまでの、もっとも確実な道すじであるとい

うことである。いうまでもなくここで上述、子供（成長）期における諸要求の充足というのは、深く子供の本性にかかわる、子供本性の充足、愛護という意味であって、子供の外面的、あるいは部分的な属性についてのことではない。この点でみるかぎり、子供の本性の充足、愛護に過保護ということはけっしてありえない。子供の愛護の必要があるのは、このように日常性のなかの子供の属性に対してではなく、ここでいう子供の本性、すべてがそこに始り、すべてがそこから萌芽発育するほかない人間本性の淵叢、子供性についてでなければならない。今日しきりに至るところで、子供の過保護の弊害が指摘されている。しかしそれらはいずれも、子供のありきたり（日常）性のなかにおける、子供の属性についてのことであって、子供本性の充足愛護に対してのことではない。子供の本性についての愛育保護は、いっそうますます必要であり、親密かつ十二分な愛護がなければ、子供は結局本性において枯涸し、貧弱になり、結果的に死ぬほかなくなる。子供の本性についての愛護と、属性に対する保護とを両者混同して、必要以上に過保護の弊害を指摘することは、子供の属性についての過保護の弊害以上に、子供にとって有害無益である。今日、保護概念の再検討が、きわめて切実で、かつ緊急事であるとみるのもこのためである。いずれにしても子供本性の愛育保護がなければ、子供の根本生命ともいうべき子供性は培われない。子供の本性が培われないだけでなく、子供性に噴泉する、大人のなかの人間（大人）性も育たない。以上このように子供性は、深く人間本性の淵叢に出発し、大人のなかのもう一人の子供、大人（人間）性もその脈流は、子供の成長（子供）期における子供性に淵源している。この意味でみるかぎり、大人（人間）性は子供本性の変容ともいうべきものであって、この両者の間に人間本性上の本質的な区別はない。

このように考えてくると、大人が子供を理解しようとすれば、大人のなかのもう一人の子供、子供性の別名ともいうべき、大人（人間）性においてするほかはない。事実、大人のなかのもう一人の子供、子供（人間）性

に乏しければ、乏しい程度にしか子供はわからない。子供の日常化された属性は目に映っても、ありきたりでない、非日常な子供の原風景（本性）は見えてはこない。まして大人が大人のなかのもう一人の子供、人間（子供）性を欠落、または喪失しては、結局、子供は永遠に、大人によって理解されるはずがないのは、あたりまえということになる。

（二）父性と母性 以上これまで、くりかえしてきてきたように、ひとは誰でも子供期に子供として、子供本性を深化培育することなしに、子供が子供となり、大人が大人ともなりうることは不可能である。この意味でみるかぎり、いま現に大人の生活をしていて、見かけ上どれほど大人に見える大人の場合であっても、ここでいう大人に価しない大人はいくらでもいる。それは表面上どれだけ大人の付属性を身につけ、大人の形を装っていたとしても、子供性に噴泉する子供の分身、大人（人間）性をもっていないくは、上出みてきた大人とはけっしていえないからである。このように考えてくると、結局、大人とは子供（発達）期に子供本性を深めて子供となり、かつ大人の今日の現瞬も、大人のなかのもう一人の子供、子供性に出発する大人（人間）性を、現に生きつつあるひとということになる。

このことはまた具体的な大人、例えば子供の両親や、あるいは父や母という大人の場合にもあてはまる。いうまでもなく、ここで親というのは、子供を出生したひと（親）のことであるが、父や母というのは、単に子供を生んだだけのひと（親）のことではない。いいかえれば親とは、子供を生めば誰でもがなりうるひとのことであるが、父母となるためには、親のなかのもう一人の子供、子供性に噴泉する父母性によって、子供の愛育体験の深化が欠かせないということである。このように考えると、ここでいう子供の親と父母とは、けっして同じ概念ではないことに誰しも気づくはずである。事実、ひとは例外なく子供を生めば誰でも親になれるが、父や母になれるかどうかは別のことである。この両者の区別はいうまでもなく、子供を生んだか否かの違いによってではなく、子供を愛育庇護した体験深

化の有無によって決定される。このようにみてくると、親は子供を生むことによって終結し、父や母は子供を生み終えたところから、その第一歩が始まるということになる。この点でみるかぎり、子供の親となることはできても、父や母とはよべない親は少なからずいることになる。またこれとは反対に、子供の生みの親ではないが、子供の育ての父母でありうるひとも、またかぎりなくいることになる。この意味でここで子供にとって、必要不可欠なのは、単なる生みの親ではなく、子供を愛育庇護する父母の資質、父母性をもった父や母ということになる。諺にこのことを「親がなくても子供は育つ」、「生みの親より育ての父母(親)」と教えている。この諺は生みの親がいなくても子供は育つが、子供を愛育庇護する父母性をもった父母がいなければ、子供は成長できないという意味に解すべきである。

いずれにしても、親とは通称上は確かに、父母をふくめた子供を生み、愛育するものの総称ではあるが、以上みてきたように、親と父母とはその内実において、両者大きく異なっている。しかもこの両者の相違は、人間の性質上、きわめて必然的かつ決定的なものである。そのことは例えば、「子供と生活」(「親の属性と父母の父母性」佐藤良吉) 所載、つぎの両者の比較をみてもわかる。

- (1)親は盲目であるが、父母は盲目ではない。(2)親は闇であるが、父母は光である。(3)親は迷いであるが、父母は確かである。(4)親は愚かであるが、父母は賢い。(5)親は弱い、父母は強い。(6)親は頼りにならないが、父母は頼り甲斐がある。(7)親には子供の属性しかみえないが、父母には子供の本性がみえる。(8)親は子供の日常性をみるが、父母は子供の非日常な原風景(子供性)に目を注ぐ。(9)親は子供の属性をよろこぶが、父母は子供の本性をよろこぶ。(10)親は子供を甘やかすが、父母は子供に甘え(愛着)させる。(11)親は子供を甘やかして、(スポイル) 台なしにするが、父母は子供に甘えさせて、いっそう子供の本性(子供性)を深める。(12)親は甘やかす(台なしにする)ことと、甘えさせる(子供の本性の要求をみたす)ことの区別が無知であるが、父母はこの二つの働きの違いを知っている。(13)親は子供の属性を保護し、父母は子供の本性を愛護する。(14)親は感情的であるが、父母は感性的である。(15)親は存在であるか、父母は実在である。(16)親は時間であるが、父母は永遠である。(17)親は浅いが、父母は深い。(18)親は狭

いが、父母は広ろい。(19)親は小さいが、父母は大きい。(20)親は低いが、父母は高い。(21)親は部分であるが、父母は全体である。(22)親は破調であるが、父母は調和である。(23)親は外面的であるが、父母は内面的である。(24)親は偏狭であるが、父母は寛容である。(25)親は苦痛であるが、父母は歓びである。(26)親は我慢であるが、父母は忍耐である。(27)親は苦しみであるが、父母は哀しみである。(28)親は痛みであるが、父母は哀切である。(29)親は生理であるが、父母は生命である。(30)親の縁はうすいが、父母の縁は親密である。(31)親はいなくても子は育つが、父母がいなくては子供は育たない。(生みの親より育ての父母)(32)親は子供を棄てても、父母は子供を棄てることはしない。(33)親は偏愛しても、父母は慈愛する。(34)親は冷めたくても、父母はあたたかい。(35)親は不親切でも、父母は深切である。(36)親は不公平でも、父母は公平である。(37)親は祈らなくても、父母は祈る。(38)親は出会わなくても、父母は子供の本性と必らず出会う。(39)親は涸れても、父母は噴泉する。(40)親は義務であっても、父母は義務を超える。(41)親は子供を卑下しても、父母は子供を尊貴する。(42)親は不安であっても、父母は安心である。(43)親は拒絶しても、父母は受容する。(44)親は疏遠であっても、父母は密着する。(45)親は変わっても、父母は不変である。(46)親は純でなくても、父母は純粹である。(47)親は真でなくても、父母は真実である。(48)親は善でなくても、父母は善にすすむ。(49)親は醜くくても、父母は美しい。(50)親は不信であっても、父母は信仰する。(51)親は絶望しても、父母は希見望を失わない。(52)親は挫折しても、父母は奮起する。(53)親は停滞しても、父母は成長する。(54)親は停止しても、父母は前進する。(55)親は憎んでも、父母は愛する。(56)親は利己でも、父母は愛他になる。

このような両者の間の相違は、このほかにも少なからず指摘することができる。事実、父母がその父性や母性において賢く、また光や愛であり、信仰ですらあることを示す例証は数かぎりなくある。一方またこの反対に、親が盲目であり、闇であり、愚かで迷いであることを示す証拠も無数にある。そのことは例えば、往昔からいい伝えられてきた、つぎのような諺(折井英治編「ことわざ辞典」所載)についてみても確かめられる。

(1)親馬鹿(親が子の愛におぼれて愚かになること。親は子に関することとなると、馬鹿のようになる。ちょっとでもすぐれているところがあれば天才のように思うし、すこしぐらい悪いところは全然目につかない。そしてはたから見ればなんでもないようなちょっとしたことを、度はずれにさわぎたてて、なんの関心もない人をつかまえてまで、しゃべりまくる。)(2)親の欲目(親はわが子かわいさのあまり、わが子を実際以上に買いかぶるものである。カラスも自分の子は鳥のな

かで最も美しいと思っている。しかし他人は実際より悪く見ようとする。) (3)親に目無し(「子の悪いのとぼんのくぼは見えぬ」というが、親はわが子かわいさのあまり子の欠点や誤りに気づかない。過ちを犯した子供の親たちは、かならず「わが子にかぎってそんなことはするはずがない」と信じている。) (4)子に引かれる親心(子供かわいさのため親の心はくもる。子故の闇ということ。) (5)子故の闇に迷う(「人の親の心は闇にあらねども、子を思う道にまどいぬるかな」で、親は子を思うあまり、冷静さをなくして、正しい判断ができないようになりがちである。泥棒の親はわが子を憎まず、縛った人を恨む。) (6)鈍な子は可愛い(親から見れば愚かな子にはふびんがまして、ひとしお可愛く思われるものだという事。) (7)焼野の雉子夜の鶴(親の子を思う情の深いことをいうたとえ。キジは巣をつくっている野を焼かれると、自分の危いのも忘れて子を守ろうとし、巣についているツルは、霜の降る寒い晩には、自分の翼で子をつつんで守るという。西洋でも「母の心はいつも子の上にある」といっている。) (8)我が子自慢は親の常(親ばかりのこと。わが子には目がないというのと同じ意味である。)

上述これらの事実から明らかなことは、親が子供を理解しようとするれば、父母のなかのもう一人の子供、父母の資質、いいかえれば父性や母性において、するほかないということである。しかもそれ以上ここでもっとも重要なことは、これら父母の資質、つまり父母性は、いずれもその源泉を子供本性に出発しているという、人間観的根本認識である。

(三)教師性 上出このことは、また学校の教師の場合にも、同じようにあてはまる。たしかに学校にどれだけ多数の教師がいても、教師に教師の資質、子供(教師)性を欠落、あるいは喪失しては、子供のなかのもう一人の子供、子供性とは出会えない。子供の外面的な付属性とかかわりはもてても、子供の本性、子供性とは無縁である。以上このような教師の資質、子供(教師)性をもたない教師の子供理解が、しばしば概念としての子供一般の解釈に終わって、具体的生命をもった、生きた目のまえにいる子供でない場合が多いのもこのためである。教師に子供性が欠落しては、子供の属性はみえても、子供の非日常な原風景、子供の本性はみえてはこないからである。

事実、子供性を自分のうちにもたない、教師の子供理解が表面的で、か

つ属性的であることを示す例は多い。例えばここに仮りに、泣く子供がいたとして、その子供の泣くことの事実や原因は明らかにできても、泣く子供の感性にまでは触れられない。泣く子供に泣きやむことを求めることはできても、泣くことそれ自身のもつ、人間感性の意味は深められない。また仮りにここに、一人の消極的で控えめな子供がいたとして、その子供の表面的な事実や、その原因は説明できても、子供の内面世界に拡ろがる秘密にまでは気づけない。消極的で控えめであるという、子供の否定的な属性は目に映っても、その特徴を子供性深化の方向にまでは導けない。さらにまたここに一人の反抗的で、拒絶的な傾向の子供がいたとして、その子供の反抗、または拒絶的事実の集積や、原因の解明はできても、目には見えない子供のなかの屈折した深層は理解できない。このほかここにまた、仮りに学校に行かない子供がいたとして、その子供を登校拒否、あるいは怠学ときめつけることはできても、その同じ子供が、実は学校に行きたがっていて、しきりに教師の手助けを求めている事実など、想像してみることすらできない。まして登校しない、どのような困難な事情の子供の場合でも、きわめて短期間に、しかも容易に、また確実に登校させうる方法があることなど、およそ工夫し考えてみようとししない。非行や不正行為があれば、簡単に退学や停学を命じることはできても、そうならなくてすむ、予防上の方法が、いくらでもあることなど思いもおよばない。子供の生育環境や家庭事情に、教育上問題のあることは指摘できても、それすら子供性深化の契機となしうることなど認めたがらない。子供の過去の分析に死頭することはしても、それ以上より重要なのは、今日以後の子供の変化（発達）に対する、確かな予測であることなどには気づけない。

これらはいずれも、その第一原因は、これまでしばしば指摘してきたように、教師が自分自身の子供（成長）期に、子供のなかのもう一人の子供、子供の本性（子供性）を深めることなしに、子供ともなりまた単なる見かけ上の大人とも、教師ともなったことに起因している。これをまた大人ある

いは教師のなかにおける、もう一人の子供、子供本性の欠落または喪失とみても同じことになる。このように考えると、大人とりわけ教師が、子供に対して充たすべき第一要件は、子供の本性、子供性の愛育培養ということにつきる。事実、子供性はすべてがそこから始まる第一原点であり、すべてがそこから生まれる母胎であるとともに、すべてがそこから育つほかない土壌ともいえる。この意味でみるかぎり、子供性の愛育培養なしには、子供も子供となりえないだけでなく、大人もまた大人にも人間にも、まして教師の資質、いいかえれば子供性をもった教師になることなどおぼつかない。これを比喩的にいえば、子供（教師）性を喪失、あるいは欠落している教師は、ちょうど翼のない、飛べない鳥にも例えられる。鳥は翼によって鳥となり、教師は教師のなかのもう一人の子供、教師の資質、いいかえれば子供（教師）性において、子供と出会える教師になる。教師の第一要件（資質）をこのようにみて、いま現に教職に携っている教師について考えてみると、子供の教師とはいえない教師はいくらでもいる。事実、この点でみるかぎり、どれだけ教科の知識に習熟し、授業に熱心な教師である場合でも、それだけで子供の教師としてふさわしいかどうかは疑わしい。どれだけ教科の成績が優秀で、教員の採用試験に合格したとしても、子供の教師に適した資質、子供（教師）性をもっているかどうかは別のことになる。この反対に教科の成績はふつうであっても、教師の資質、子供性に恵まれた子供本位の教師はいくらでもいる。この両者の根本的相違は、いうまでもなく教師が、教師のなかのもう一人の子供、教師の資質、子供性を内面深く、噴泉しているかどうかの一点によって区別される。

以上このことは、医師が自分のなかに医師性、例えば痛みの体験をもっていなければ、医学的な病理はわかっても、病者に共感できないのに似ている。そのことは例えば、日野原重明「老いを創める」（「朝日新聞」所載）にけおる、「病を自己のうちにもつ医師が、病人を扱う方が病者の観察や理解、共感性の点ですぐれている」以下、つぎの指摘をみてもわかる。こ

のことは親や大人、とりわけ教師が教師の資質、子供（教師）性を自分の内面にもち、子供とかかわり、子供と出会い、深く子供と邂逅しあおうという場合にも、同じようにあてはまる。

昭和12年に京都大学医学部を卒業し、当時の制度では国家試験なしで医師免許証を下付されて医師となった私である。それから半世紀近くが経過した。その間、私は内科医として数多くの患者さんを診療し、主治医として患者の死の床にはべった数は千を超える。……私は明治44年生まれで72歳3カ月であるが、65歳の誕生日を迎えた時、はじめて自分に「老年」の刻印がおされたように感じ、それから、おそらく私の潜在意識の操作で、年のことを考えようとしないう心境になった。私が老人医学の論文を書く時は、対象の老人グループから自分を外して論文をまとめたように、いまにして思う。ところが、私が70歳を過ぎたある日、一枚の原稿用紙を2本の指でもちながら書斎内を歩いていた時、その原稿用紙が指から床に滑り落ちた。私は瞬時「はっ」として、「桐一葉落ち……」てという天下ならで私の人生の秋を感じた。そして70歳を過ぎてからは、老化の過程をまとめる時には、自分を観察、分析することで老化の執筆を実のあるものとするように感じるようになった。これは病を知らない医師が病人を扱う場合よりも、病を自己のうちにもつ医師が、病人を扱う方が病者の観察や理解、共感性の点ではすぐれていることに似ているな、と思うようになった。

このことはまた、例えばつぎの「入院して患者の心を知る」（「朝日新聞」所載）についても同じようにいえる。いずれにしても教師が教師の資質、教師のなかのもう一人の子供、子供（教師）性を欠落または喪失しては、子供はけっして教師によって理解されうるはずのないことは、これらの引例にてらしてもわかる。

医学部に入学して4年目の昨夏、私は入院することになった。覚悟はできていたものの、診断名とその予想される転帰に動揺した。突然ふりかかってきた運命になすすべもなく思い悩み、絶望する日々が続いた。しかし同時に、わずか4年間で医者側の立場に立ちつつあった自分に驚いた。患者になってみて、検査の手順やコツ、診断方法等に目を奪われて患者の苦痛や心情をおもんばかることを忘れていたことを恥じた。患者の目で様々な医師の態度を見、他の患者の話をきいて、医学生として膨大な知識を詰め込むことに追われるうちに、いつしか患者という人間を忘れ、病気しかみえなくなることはおそろしいと思った。それから、

薬の副作用で発熱し、試験勉強ができずにいら立つ時も、家庭や様々な生活をもちながら病を背負うて苦しむ多くの人びとを思った。医師として志半ばになるやもしれぬわが身を嘆く夜もなくなった。いま私は、あの失意の日々から立ち直り、患者の目と医師の目をもったこの立場で、二度と行き詰まることなく前進することが私の運命を生かすと考えている。また多くの医学生は、閉鎖的で特殊な環境の中で陥りがちな高慢さに、自らを戒めることを忘れてはならないと思う。

(5) 子供性の回復

(一)子供理解の原理 以上この意味でみるかぎり、大人が子供を理解しようとするれば、大人のなかのもう一人の子供、子供性の別名としての、大人（人間）性の原理において、わかる以外にないことが、いっそう明らかになる。親が子供を見ようとするれば、親のなかのもう一人の子供、子供性に噴泉する、父母性の原理においてみるほかないことが、ますます確かになる。そしてさらに教師が、子供をけっして見失うまいとするれば、教師の根本資質、教師のなかのもう一人の子供、子供性に噴出する教師（子供）性の原理によるほかないことが、いっそうますます明白になる。大人が子供期を経て、見かけ上の大人にはなりえても、大人のなかのもう一人の子供、子供（大人）性を欠落、あるいは喪失しては、子供の付属性は目に写っても、子供の非日常な原風景、子供の本性は、わかりはしないからである。親は子供を生むことによって親にはなりえても、親のなかのもう一人の子供、父母性をもった父や母でなければ、子供は見えてきはしないからである。教師にしても同じことであって、授業をうけもつ、単なる教師になることはできても、教師の資質、子供性に出発する教師（子供）性に恵まれていなければ、子供の本性と出会うことは、絶対にありえないからである。この点でいえば親や教師をふくめた大人が、子供を見失い理解できなくなってしまっているということは、実は大人が自分自身のなかのもう一人の子供、子供性に噴泉する大人（人間）性や、父母性や教師性を、見失ってしまっているということと同じことになる。いずれにしても子供がわかる

大人、子供が見える父母、子供をけっして見失うことのない教師に共通していえることは、いずれもその内面深く、子供性に噴出する、大人のなかのもう一人の子供、ゆたかな大人（人間）性や、父母性や教師性を宿しもっているという事実である。

(二)子供性の回復 父母と教師をふくめた、大人の本性をこのようにみて、当然辿りつく帰結は、親や教師をふくめた大人自身のうちに、大人のなかのもう一人の子供、大人（人間）性と、父母性と教師性の回復、復活こそ切実であるということである。事実、大人は大人として、大人であることのありきたり（日常）性を脱皮して、大人のなかのもう一人の子供、大人（人間）性をこそ回生、復興する必要がある。親は親として、親であることの日常性を排除して、親のなかのもう一人の子供、父母性の噴泉をこそ促す必要がある。さらに教師は教師として、教師であることの日常情性を払拭して、教師のなかのもう一人の子供、教師性の覚醒こそ重要である。親や教師をふくめたすべての大人が、いま現に目のまえに、いま両手の届く場所にいる子供を、いま目のまえに、いま両手の届くところに、子供はけっしていないという非日常の世界に自身をおきなおして、いま目のまえに、いま現に手の届くところにいる子供に、両手をさしのべ、深くみつめなおし、愛を傾け、切実多感な祈りをこめて、かかわりをもち、出会い邂逅することである。このことなしには、どれほど社会の体制が変わり、教育の制度や、内容あるいは方法上の工夫がなされたとしても、子供は永久に、大人によって理解されうることはまず期待できない。

今日、時とところとを問わず、また国をあげて、教育改革の必要が叫ばれている。教育世界はこうして、かつての高度経済成長期における、教育爆発の時代から、教育怒濤の時代へと突入しつつあるともいえる。その様相は深刻で、これに対応する大人の方策は、少なからず凄絶で無気味ですらある。しかしどれほどその必要が、国をあげ地域や学校ぐるみで、声高かに叫びつづけられようと、その根本基底に上出これまで繰り返えしみ

てきた、親や教師をふくめた大人の資質、大人のなかのもう一人の子供、子供性復活の深い覚醒がなければ、いま現に目のまえに生きている子供の救済、助力には無縁である。しかもそれだけではなく、その必要が声高かに、叫けられれば叫けられるほど、それとは反対に、子供のなかの子供本性すら、それら喧噪の渦のなかで、見失われかねないという心配もある。

いずれにしても子供は、いまこの現瞬も、大人の身のまわりに、親の身近かに、教師の手の届くところに、いつでもどこにでも、しかも百人百様の様々な子供がいる。これらの子供を大人が理解し、親が深くかかわり、教師が間違いなく出会おうとすれば、哀切多感な感性をこめて祈り、大人のなかのもう一人の子供、子供性に噴泉する大人の資質、人間性と父母性、そして教師性の覚醒をこそ深く自覚することである。この意味でいえば、いま親や教師をふくめた大人に、もっとも激しく問われていることは、教育制度の改革や、教育内容や方法上の工夫についてはいうまでもないが、結局、大人のなかのもう一人の子供、すべてがそこから出発、あるいは萌芽するほかない人間本性の原点、子供性の回復復権ということになる。

参 考 文 献

- (1)人間形成の明日 原田実 (2)日本教育史 中山一義 (3)Rousseau, : Émile ou De L'Éducation. (「エミール」押村襄訳) (4)Fröbel, : Die Menschenziehung. (「人間の教育」荒井武訳) (5)Ellen Key, : The century of the child (「児童の世紀」原田実訳) (6)Dewey, : Experience and Education (「経験と教育」原田実訳) (7)Comenius, : Didactica Magna. (「大教授学」稲富栄次郎訳) (8)M. Montessori, : Education for Human Development, (「人間らしき進歩のための教育」周郷博訳) (9)魂の発見—シュタイナー学校の芸術教育 子安美知子 (10)Waldorfpädagogik in öffentlichen Schulen, (「授業からの脱皮」子安美知子監訳) (11)幼児体験—母性と父性の役割 鈴木秀男 (12)出会いについて 小林司 (13)ヨーロッパ近世教育思想史 原田実 (14)Ulich, : History of Educational Thought, (「教育思想史」松浦鶴造訳)